尼寺廃寺と聖徳太子

タウンウォッチャー　馬越近成（白鳳台）

尼寺廃寺は、華厳山般若院片岡尼寺として、聖徳太子の開山であることについて述べてみたいと思います。

今から約百三十年前（一八六〇年代）の幕末の頃、尊皇攘夷だ、佐幕開国だと紛糾しながら結局、明治の国際化に向けて時代は大きく変わりました。明治六年、香芝では大変悲劇的なことが起こります。

過激な廃仏毀釈、神仏分離令運動などによって尼寺廃寺は破壊され、薬師寺跡・ド山・般若院跡などにも深い傷痕を残しました。この時、志都美神社の明王院や、穴虫の大坂山口神社の祇園神宮寺も破壊され、現在の武烈天皇陵、顕宗天皇陵（及び陪塚一号墳、二号墳、三号墳）と二上山の大津皇子墓などが勝手に決められました。

来迎寺の過去帳（撮影:筆者）

尼寺廃寺が破壊された理由は、華厳山（菩薩の徳果が円満に備わることを意味し、太子に対する信仰心を表す）の方丘に厨神社が祀られているので神仏分離令の名の下に破壊しろという短絡的な発想がありました。しかし、このために尼寺廃寺は太子の開山であることの証明をより明確にすることになりました。

その証明は①来迎寺の過去帳、②龍田本宮古図、③般若院に残る諸資料などを検証することからはじめました。来迎寺の過去帳（写真）では、「薬師寺八開山太子勝鬘大菩薩（太子のこと）始草創已来…華厳山般若院片岡尼寺ノ中ニテ目中寺ト名ク本尊薬師寺如来ナリ…中奥ノ本尊ヲ阿弥陀如来ニシタルヤ…難シ」とあります。般若院毘沙門堂に安置する毘沙門天の背面、腰の墨書に「華厳山般若院片岡尼寺、開山皇太子勝鬘菩薩」とあり、毘沙門堂横に置いてある般若院五輪塔の地輪に「明応四（一四九五）年阿闍梨快弘逆修」とあり、阿闍梨を派遣しなければならない程、般若院片岡尼寺＝妙安寺（葛城尼寺）は大寺院であり、十五世紀まで法隆寺の末寺であったことや、更に聖徳太子の逆修墓にあやかって逆修五輪塔墓を築いたであろうことを窺わせます。

次に何故この片岡の地に尼寺廃寺（片岡僧寺・片岡尼寺）を開山するに至ったかを述べます。

厩戸皇子は物部との合戦のとき、信貴山にも基盤があった秦氏を頼ります。合戦後、信貴山には剣鎧神社が、東大阪市の石切神社には石切剣箭神社が祀られます。廣隆寺來由記には、「蜂岡寺と桂宮院八角堂。秦氏系図、高麗彗慈法師蓋密宗者。道昌僧都随弘法大師。天長年中受密灌。」とあり、また上宮法王帝説では、「…蜂丘寺（彼の宮と併せて川勝秦公に賜ひき）、…葛木寺（葛木臣に賜ひき）。」とあり、太子と秦氏は関係のあったことが記載されています。

天皇の統治権がまだ確立されず天皇家の統治領地もまだ曖昧だった中で、太子が大陸との国際化に向けて時代を大きく変えようとしました。そのためには文化革命による太子の文化圏をつくる必要があったのです。その文化圏の基盤に尼寺廃寺の創建があったと思われます。

太子が斑鳩宮に居を移されたのは推古九（六〇一）年であり、わが国の仏教の興隆に尽くされ、法隆寺を建立されたことは有名な話しですが、太子の薨去後、多くの高僧や文化人、政治家が太子の遺徳を慕って、太子信仰を不滅のものとしてきました。

「尼寺廃寺と聖徳太子」に係わりのある資料についてさらに調査研究したいと念じています。

筆者は、『尼寺廃寺と聖徳太子』の更なる探求と資料の編纂に努めて参りましたが、あいにく病を得、一九九九年二月二十二日、こころざし半ばにして無念の筆を折ることになりました。興味を抱いてお待ち下さいました皆様には申し訳なく存じますが、これが遺稿となりました。これまでご愛読いただきありがとうございました。

衷心より御礼申し上げます。（馬越史歩）

筆者のご冥福をお祈りいたします。

（編集係）